

論文の和文要旨

論文題目	ベトナム村落の民族誌 —新郷約を鏡としてみた社会関係と信仰祭祀
氏名	比留間 洋一

本研究は、人類学的調査から得られた資料に基づく、ベトナム北部デルタ村落の暮らしと歴史経験の民族誌である。特に、1990年代の市場経済発展期における社会関係と信仰祭祀に焦点をあて、それを新郷約（村掟を定めた公的文書）という新しい資料を手がかりとして明らかにするものである。

本研究の大きな特徴として、東アジアの文化伝統である郷約（村の掟を定めた公的文書）を、実際の村落生活の「鏡」として用いる点が挙げられる。郷約は、東アジアの儒教・漢字文化圏に属する中国、朝鮮半島、ベトナムにおいて、15世紀以降に作成されたが、近現代以降、中国と朝鮮半島では、郷約がほとんど作成されなくなった。これに対してベトナムでは、特にフランス植民地期と1990年代に、多くの郷約が作成された。現代のベトナムは、郷約という東アジアの文化伝統を、実際の村落生活との関わりから検討する上で格好の対象なのである。しかし、そのような郷約の人類学的研究はこれまで手つかずであった。

特筆すべきことは、1997-1998年という筆者の調査実施期間が、調査対象村落で新しい郷約が編纂、施行された1998-1999年の直前に当たっていることである。そのため、筆者は、先行研究に比べて極めて有利な立場で、新郷約が、実際のどのような社会関係や信仰祭祀を映し出しているかについて考察することができたと考えられる。

本研究の第1章では、以上のような本研究の目的と研究背景を設定する上で前提となってい

少を補うような形で、ゾンホの活動が再活性化し、むらの社会生活におけるゾンホの役割が大きくなりつつある。

4章では、小規模ゾンホと、「むらの婿」の人々に焦点をあてて、むらの社会関係の中で、大規模ゾンホではないことが何を意味するのかを論じる。イエンサーでは、「むらの婿」とは、1954年以降にイエンサーの女性と結婚し、居住するようになった人々のことを指す。具体的には、イエンサー新郷約が、第一に、1954年以降に移入者が増えたことに触れ、第二に、イエンサーに居住するむらの外部者も新郷約を守るよう明記していること、第三に、むらの外部者が一次埋葬のためにイエンサーの土地に「寄葬」する際の手続きを定めていることの背景として、小規模ゾンホとむらの婿の人々をめぐる社会関係の史的変遷と、1990年代以降にそれらの人々が設立した互助を目的とした任意組織について説明する。

5章では、入夏儀礼という夏の行事をとりあげ、特にソム（むらの下位単位）における女性を中心とした社会関係と信仰祭祀について論じる。具体的には、第一に、新郷約が、入夏儀礼のやり方について定めていることの背景として、イエンサーにおける入夏儀礼の史的変遷と、1990年代以降、とりわけ一つのソムで盛大に行われている様子を観察に基づき具体的に描き出す。そのソムは、4章で説明した任意組織を設立したソムである。第二に、任意組織の設立と入夏儀礼の組織化との相関関係について考察する。

6章では、引き続き、信仰祭祀を介した、女性を中心とした社会関係について論じる。具体的には、イエンサー新郷約が、第一に、寺に対する村の主導権を強調していること、第二に、ハウボン憑依儀礼は禁止しているが、そのための入信儀礼（ドイ・バット・ニャーン）は禁止していないことの背景として、それぞれ、第一に寺の碑文などを基に寺と村人との関係の史的変遷と現状を考察し、第二に1990年代以降のハウボン憑依儀礼と入信儀礼の隆盛とそれに対する社会と家族の見方を検討する。

7章では、むら祭りと言寿祝いを通して、「むら」という「わたしたち」意識をめぐる問題について論じる。具体的には、第一に、イエンサー新郷約が、むら祭りの新しい動員方法、亭・廟の管理運営について定めていること、第二に、言寿祝いと老親の扶養について定めていることの背景として、それぞれ、第一にむら祭りの史的変遷と1990年代以降のむら祭りの復興について詳細に再構成し、第二に言寿祝いについては史的変遷、老親の扶養については世帯調査や観察に基づく説明を行う。

終章では、イエンサーの新郷約と実際の社会関係・信仰祭祀との相関関係についての分析から、新郷約は、党・国家の指導・管理の影響が強い一方で、1990年代の市場経済発展期にお

ける新たな社会状況に対して北部デルタ村落の人々がどのように反応したのかを理解する重要な手がかりとなることを、結論として提示する。